

ブダペスト◎盛田常夫

マジヤール少数民族問題

そろそろ手紙の準備を始めなくては考えていたところ、ハンブルグ・オープンでセレシュが刺されるというショッキングなテレビ画面に遭遇しました。セレシュの国籍は確かに新ユーゴスラビアなのですが、彼女はセルビア人ではありません。ハンガリーとの国境近くのヴォイヴォジナ自治州出身で、両親ともマジヤール（ハンガリー）人です。テレビのコメンテータはセルビア＝ボスニア戦争、あるいはセルビアにおけるマジヤール民族問題が事件の背景にありうると述べていましたが、実際には性格異常者の犯行のようです。早速、ハンブルグ在住のセルビア人の抗議デモが組織されましたが、セレシュにとっては痛し痒しというところではないでしょうか。

コメンテータが図らずも危惧したように、実は中・東欧の最大の民族問題はマジヤール少数民族問題です。旧ユーゴスラビアの軍事紛争は同じスラブ民族間の闘いですが、マジヤール民族問題はオーストリア＝ハンガリー帝国の崩壊の結果、縮小されたハンガリーの国境外に取り残されたハンガリー人問題です。

●ルーマニアの少数民族問題

かつてのルーマニア女子体操のスター、コマネチもマジヤール人で、彼女の場合にはルーマニア姓に改名してコマネチを名乗るようになりま

した。彼女はマジヤールを捨てることで名声を手に入れましたが、その成功でチャウシェスク一族の虜にされてしまったわけです。スポーツを利用して、民族高揚、名声・私利私欲を得ようとするのは、古今東西にみられる現象です。政治家がスポーツ選手の名声を利用するのは日本でも同じでしょう。

ハンガリー国外に取り残されたマジヤール少数民族問題は、ルーマニア、スロバキア、セルビア、クロアチア、ウクライナのハンガリーの隣国すべてにかかわる問題です。第一次世界大戦後のトリアノン条約で、東は平野で国境が仕切られてしまったために、カルパチア山脈の高原地帯に多数のハンガリー人が隔離されることになりました。ルーマニア北西部の丘陵地帯はいまでもハンガリー人が300万人近くも在住する地域です。多くの山村ではハンガリー語だけが通用します。

チャウシェスクにとって、マジヤール民族問題を清算することが晩年の重要課題で、ハンガリー人村落を壊して農業団地に移住させ、ルーマニアへの同化を図りました。皮肉にも、この地域のハンガリー人の精神的な支えであったトゥーキシュ牧師の迫害を契機にティミショアラの住民が示威行動に立ち上がり、その数日後に開かれた首都ブカレストでの緊急集会でのちょっとした混乱が引

き金で、一目散に逃亡したのが事の顛末です。

チャウシェスク亡き後のハンガリー少数民族問題に本質的な変化はありません。逆に悪くなっている側面もあります。これは意外なようですが、長年のチャウシェスク支配下の民族意識・文化の変革には長い時間が必要なことを教えています。ルーマニア経済の状態が悪いだけに、常に支配層は不満のはけ口を少数民族に向けさせる危険性ははらんでおり、経済状態が大幅に改善され、経済交流が完全に自由化されるまで、くすぶった関係は解消されないでしょう。この地域の民族問題は結局のところ、経済問題なのです。

●スロバキアへの旅

やや規模は小さいですが、スロバキアにも60万人のハンガリー人が在住しています。スロバキアの人口のおよそ12%を占め、主にドナウ河を挟んだスロバキアの南部、東南部がハンガリー系住民の居住地域です。

ブダペストをドナウにそって50キロ北上すると、鈴木自動車（ハンガリー鈴木）の生産拠点エステルゴムにでます。ここでドナウは東方から南方へと直角に流れを変えるのでドナウ・ベントと呼ばれていますが、おそらく長いドナウの流れのなかでもっとも美しい景色が広がるころでしょう。このエステルゴムからド

ナウを渡るとスロバキアです。対岸へはフェリーが運行されていますが、一般の車両は通行できません。

エステルゴムからドナウ沿いに西へ50キロほど進んだ地点に、ドナウの国境ポイント、コマロムがあります。スロバキアへの車の旅行はこのポイントを通過するか、ウィーン街道をオーストリア国境近くまで走り、そこから北へ15キロほど走って平野のポイントを通過するかのどちらかです。この後者のポイントからブラチスラバへは10キロほどの道程です。

4月半ば、スロバキアの首都ブラチスラバの「ハンガリー人学生ネットワーク」から講演の依頼があり、出かけてきました。ブダペスト経済大学の私の講義をスロバキアの留学生が聴講しており、この組織のセミナーにハンガリー語で講義してほしいという頼みがあったからです。分離・独立後のスロバキアを見たいという思いもあり、引き受けました。

スロバキアは第一次世界大戦まで、1000年ものあいだ、ハンガリーの版図にありました。オスマントルコの侵略時代、ブラチスラバ（ハンガリー名：ポジョニイ）はハプスブルグ・西ハンガリーの首都として機能し、その後も1848年の革命時にいたるまでハンガリー国会の所在地でした。ドナウの河岸に広がるブラチスラバはハンガリー貴族によって建設された街で、小ブダペストといった風情があります。

ブラチスラバの中心、フォーラム・ホテルの近くに、タートル・ホテルがあり、そのはず向かいが「ハンガリー文化センター」になっています。学生ネットワークの会員は中等・高等教育機関の学生3000人で、その中心になっているのは経済大学の学生です。面白いことに、経済大

学8000人の学生のうち、女子学生が7割を占めるといいます。オフィスワークの実務者を育てることがこの教育機関の設立目的だったようですが、分離・独立後はスロバキアの経済管理者を育てる方向に教育方針を転換しはじめました。

スロバキアには高等学校までハンガリー語の学校はありますが、大学はスロバキア語のみになります。公用語もスロバキア語ですから、高等学校までハンガリー系の学校に通うと、まず指導的な地位を約束される教育機関に入ることができません。事実、ハンガリー系住民の高等教育機関への進学率は3%ほどだといえます。スロバキア語は完全なスラブ語ですから、ハンガリー語とはまったく言語上の接点はありません。言葉の障害がスロバキアにおけるハンガリー系知識人層の育成を妨げています。

ここでも経済困難が少数民族の迫害へと向かわないという保証はなく、ハンガリー系住民の最大の懸念は、チェコからの分離・独立で内向きの政策がとられ、民族問題が先鋭化することです。

●揺れる決断：ウクライナの少数民族

ウクライナとハンガリーの国境地帯はウクライナの亜カルパチア県ですが、この地域は第二次世界大戦までハンガリーの領土だったところです。その県都ウジュゴロード（ハンガリー名：ウングヴァール）はハンガリー国境から30キロに位置する人口12万の都市です。

ウクライナの公式統計によれば、亜カルパチア県の人口は125万人、ウクライナのハンガリー人は16万人です。ハンガリー系の住民の多くは

ウジュゴロード周辺に在住していると考えられますから、この地域のマジャール人のウェイトはかなり高いと推定されます。

4月から5月にかけて、ハンガリー国会はウクライナとの基本条約の批准問題で大揺れでした。現在の国境線を承認する基本条約を認めることで、将来の国境変更の可能性を失ってしまうとする与党内部の民族主義派が激しく抵抗したためです。最終的には、5月11日の記名投票によって、賛成223、反対39、保留7で批准されましたが、この論戦によって改めてハンガリーの少数民族問題の解決方法が問題の焦点として浮かび上がりました。

ハンガリーの極端な民族主義を警戒する国際世論もありますが、実際にはそのようなグループはきわめて小さな集団にすぎず、民族問題は国境線の変更を提起することで解決できない、というのがハンガリーの常識的な共通理解です。国境線論議がかえって国外のハンガリー人の状況を悪くさせるだけでなく、無用な国際紛争を惹起させるというのが政府と野党の基本的な立場ですから、第二の民族戦争が始まることはありません。

国境線の変更ではなく、国境通過の自由、自由経済交流が達成され、少なくとも経済的な意味での国境が解消されていくことで、マジャール民族問題は解決できるはずですが。政治的関係が良好なウクライナが、ウジュゴロード周辺を自由経済圏にすることで、その第一歩が踏み出されることになるでしょう。

[1993年5月14日 ブダペスト]

(もりた・つねお／野村総合研究所研究顧問・ブダペスト経済大学客員教授)